



This number

2018年度のクマ事情

毎年恒例の「今年度のクマ事情」の特集コーナーです。JBNの各地区委員の方々より、①堅果等の結実（豊凶）の状況に加え、②出沒、③捕獲、④人身事故の「多寡」や「特筆すべき状況」等をご報告いただきました。

どのような1年だったのでしょうか。各地の様子から、平成の「次の時代」に向けたクマたちの姿が垣間見えてくるかもしれません。クマたちとの付き合い方、一緒に考えていきましょう。

もくじ

北海道地区：釣賀一二三（北海道立総合研究機構）・山本牧（ヒグマの会）・早稲田宏一（NPO法人EnVision環境保全事務所）・葛西真輔（知床財団）…p.3

東北地区：鵜野レイナ（JBN東北地区委員代表）・宇野壮春（合同会社 東北野生動物保護管理センター）・泉山吉明（秋田県自然保護課）・岩手県自然保護課担当者…p.4

関東地区：後藤優介（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）…p.6

中部地区：玉谷宏夫（NPO法人ピッキオ）・竹内翔（静岡県経済産業部管理局）・加藤春喜（NPO法人白川郷自然共生フォーラム）・早川美波（信州ツキノワグマ研究会）…p.8

北陸地区：白石俊明（立山カルデラ砂防博物館）・箕口秀夫（新潟大）有本勲（山立会）・松村俊幸（福井県自然保護センター）…p.9

近畿地区：中川恒祐（野生動物保護管理事務所）…p.11

中国地区：澤田誠吾（島根県中山間地研究センター）…p.12

四国地区：山田孝樹（四国自然史科学研究センター）…p.13

各地区委員の皆様に、以下の質問をしました。

- ① 豊凶（結実状況） ② 出沒 ③ 捕獲 ④ 人身事故
の各項目の「多寡」や「特筆すべき状況」について
⑤ その他（上記以外にも特筆すべき状況や、地域のクマに
関するイベント・情報があれば）

* ①～④の情報は環境省のwebサイトでも毎年の速報値が公開されるようになり
ましたが、こうした数値だけでは読み取れない情報も満載です。



北海道地区

釣賀 一二三（北海道立総合研究機構）
山本牧（ヒグマの会）
早稲田 宏一（NPO法人EnVision環境
保全事務所）
葛西 真輔（知床財団）

概況 今年度は、106年ぶりとなる利尻島への上陸や島牧村の住宅地に相次いで出沒するなど、全国でも話題になった出来事がありました（各地域の報告参照）。利尻島への上陸はさておいて、市街地への上陸は北海道各地で発生しており、近年において出沒や被害の発生は増加傾向にあります。それに伴い、捕獲数も1962年（昭和37年）以降で2番目に多い数値（850頭）を記録した昨年度と並ぶ数のヒグマが捕獲されました（850頭、12月14日現在の暫定値）。結実状況に関しては、道庁が堅果（ミズナラ・ブナ）と漿果（ヤマブドウ・サルナシ）について発表しており、いずれも不作～凶作であるとして注意を喚起しています。この結果については必ずしも各地の状況と一致しておらず、道庁でも限られた地点における結果であることに留意する必要があります。将来的には、より正確に実状を把握できる体制を整えることが重要です。人身事故は3件が発生していますが、12月1日には道東の標茶町でヒグマの会主催のヒグマフォーラムin標茶が「なぜ起きた人身事故～その原因と対策」をテーマに開催され、100名を超える参加者がありました。

1. 道北地方

① **豊凶** 不作という声も聴きますが、旭川周辺で見た限りでは、ミズナラは並かやや良、ヤマブドウも良と思います。サルナシ（コクワ）は不作。

② **出沒** と ③ **捕獲** 利尻島で106年ぶりにヒグマが確認されました。5月30日に島の南西部で足跡が見つかり、自動撮影からオス成獣とみられます。ほぼ島を一周する形で痕跡があ

りましたが、7月12日を最後に途絶えました。上陸地点に近い場所から島を泳ぎ出たと考えられますが、その後の情報はありません。地元自治体は緊急事態に備え捕獲のための箱ワナを準備しましたが、このクマに問題行動は見られず箱ワナ設置は行われませんでした。

旭川市と比布町の境にある突哨山では半世紀ぶりのヒグマ出沒があり、5月から12月まで遊歩道が閉鎖されました。オス成獣と2歳若グマの2頭が確認され、周辺農地での被害もありました。このほか旭川市内ではスイートコーンやハチ箱の食害があり、2頭が駆除されました。特にコーン畑の被害は、日中もクマが現れ年々被害が拡大しています。

④ **人身事故** 特になし

⑤ **その他** 出沒の増加に対応し、自治体の職員や住民向け研修の開催が増え、上川総合振興局、旭川市、上川町、南富良野町などで実施されました。

2. 知床半島

① **豊凶** 斜里町のミズナラ堅果の実りは悪かったものの、サケマスの遡上は例年並みでした（↓参照）。

・ミズナラ堅果調査：北海道森林管理局

<http://www.rinya.maff.go.jp/hokkaido/siretoko/donguritop.html>

・海区サケマス速報：網走海区漁業調整委員会

http://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sis/announcement_of_salmon.html

② **出沒** 斜里町及び羅臼町では、昨年に引き続き各地でヒグマの出沒が相次ぎました。斜里町では目撃数が1,618件となり2012年に引き続き6年ぶりに1,600件の大台を突破し、羅臼町でも285件と4年連続で200件を突破しました。

③ **捕獲** 有害鳥獣駆除や狩猟による捕獲は、斜里町13頭、羅臼町12頭の計25頭、2017年に

36頭を数えた両町の捕獲数は2年続けて30頭を下回りました。

④ 人身事故 特になし

⑤ その他 ▶飼いやぎがヒグマに被害されるといった事案が発生し、一部報道でも大きく取り上げられました。▶地域住民や国立公園の利用者を対象に、ヒグマとの軋轢防止を目的にした情報提供サイト「知床のひぐま」を知床財団が開設、SNSも活用した情報発信を行っています。



知床のひぐま

3. 札幌市

① 豊凶 ミズナラの結実状況は大変良く豊作でした。定量的な調査を行っている2012年以降では、2016年に並んで良い状況です。

② 出沒 137件となっており、前年に引き続き増加傾向にあります。特に今年度は5月後半から7月にかけて親子連れ（0歳連れ）が市街地とその周辺に出沒する事例が多くみられています。これは、繁殖期のオスを忌避する行動と関連しているのではないかと推察しています。

③ 捕獲 例年との大きな変化（増減）はありません。



④ 人身事故 特になし

⑤ その他 ▶12月8日に「きたネット（NPO法人北海道市民環境ネットワーク）フォーラム」が「都市とクマ」をテーマに開催され、200人が参加しました。▶2月8日に「さっぽろヒグマフォーラム」が開催されました。

4. 渡島半島

① 豊凶 堅果類ではミズナラの結実状況が並作、ブナは不作でした。漿果類についてはヤマブドウが不作で、サルナシは地域差が大きく不作～豊作でした。

② 出沒 報道やネット上でも話題となりましたが、渡島半島の日本海側北部に位置する島牧村では、7月から9月にかけて住宅地やその周辺への出沒が続き、コンポストを荒らす、窓ガラスが割られるなどの被害が発生しました。出沒の時間帯が夜間に集中し、住宅地であることから捕獲活動は困難を極めました。9月末にオスの個体が捕獲された後は状況が落ち着いています。村では、来年度に向けて地域

をまたいだ長距離の電気柵を人家裏に設置することなど、対策を検討しています。渡島半島全域の出沒件数は603件（12月31日現在の暫定値）となっており、高い水準にあります。

③ 捕獲 12月14日時点の暫定値で197頭に達しており、昨年度の168頭を大きく上回っています。内訳はメス60頭に対してオス137頭となっており、オスに偏った構成となっています。

④ 人身事故 4月に函館市で1件、10月に八雲町で1件の発生がありました。いずれも被害者が音を立てるなどの対策を実施していなかったことにより突然遭遇してしまったことが要因と思われますが、幸いにも命に関わるような状況には至りませんでした。



鵜野レイナ（JBN東北地区委員代表）
宇野壮春（合同会社 東北野生動物保護管理センター）
泉山吉明（秋田県自然保護課）
岩手県自然保護課担当者

概況 出沒が多いと言われた2016、2017年度よりは落ち着いた傾向を示しました。初夏～夏にかけての出沒が比較的多かったため大量出沒が懸念されましたが、秋の出沒はそれほど多くはなく（図1）、例年並ないし例年並

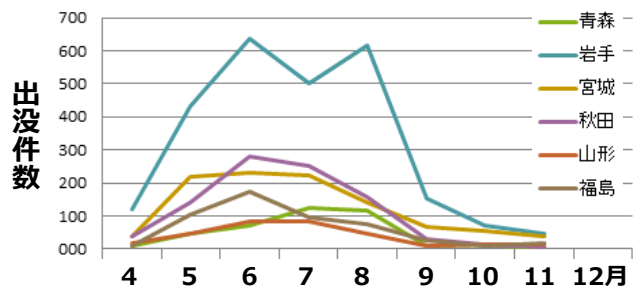


図1 東北地区の2018年の出沒件数 環境省HP・クマ類の出沒件数より12月更新の速報値を利用

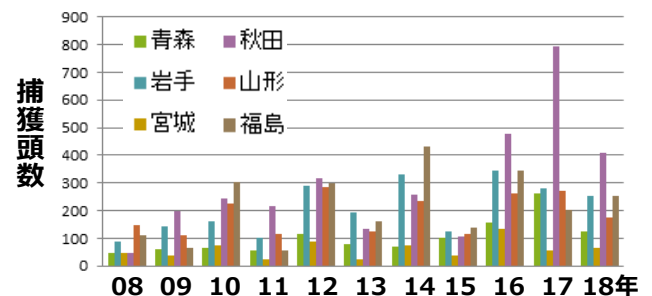


図2 東北地区の捕獲頭数 環境省HP・クマ類の許可捕獲数・12月更新速報値を利用

より少し多めという傾向で落ち着きました（図2）。

1. 青森県

- ① 豊凶 情報なし
- ② 出沒 8月の出沒件数が例年より多くなり（図1）、その後のクマによる人身被害や農林水産物被害の発生が懸念されたため、9月12日より11月30日までツキノワグマ注意報が発令（注1）されました。
- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 3件

（注1）青森県ツキノワグマ出沒注意報等発表実施要領第3条第2号に規定する「当該月のクマの目撃及び人身被害等の件数（以下「出沒件数」という。）が例年より多いとき」に該当した。

2. 岩手県

- ① 豊凶 ブナは並作、ミズナラとコナラは凶作。
- ② 出沒 東北の中では岩手県が突出して出沒が多いように見えますが（図1）、例年の傾向と大きくは変わりませんでした（図3）。12月における出沒件数は13件となり、総数2589件でした。
- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 12月末現在、12件でした。発生地域や時刻などは県のホームページに詳細が記載されています。出沒対策として狩猟期間を延長とし、通常は11月15日開始のところを、ツキノワグマについては11月1日より開始という対策を取っています。

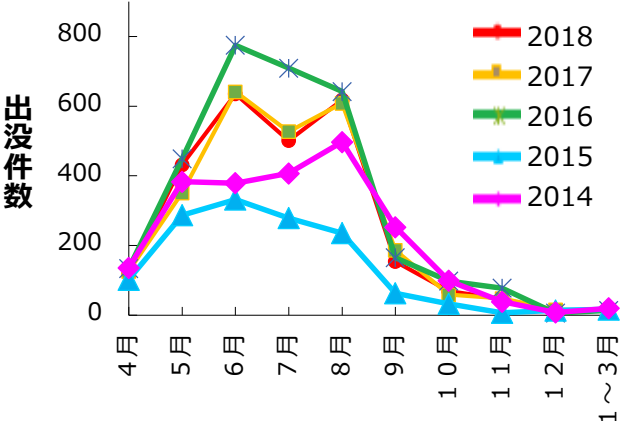


図3 岩手県における月別のツキノワグマ出沒状況（岩手県HPより）

4. 宮城県

- ① 豊凶 情報なし
- ② 出沒 例年並。環境省HPの1月7日更新の出沒件数によると2018年度は1010件となっています。
- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 1件



5. 秋田県

- ① 豊凶 ブナは並作～豊作、ミズナラは凶作～並作、コナラは並作～豊作との情報あり。
- ② 出沒 春～夏にかけての出沒が多く、大量出沒が懸念されました。9月より秋の目撃件数は減り（図1）、出沒は落ち着いたように見えます。12月24日現在の出沒件数は919件(前年比-379件)です。こうした状況の中、秋田県は4月23日よりツキノワグマ出沒注意報を発令しました。6月26日～10月31日までの期間は警報、秋には目撃数が激減したため、注意報に格下げして11月30日まで継続して注意喚起を行いました。
- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 7件発生し、初夏から夏にかけて出沒の多い時期と重なりました。秋田県ではツキノワグマへの知識と理解のため、出前講座を積極的に行っています。

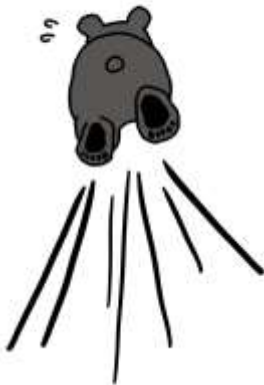
6. 山形県

- ① 豊凶 ブナは並作～豊作、ミズナラとコナラは凶～豊作とエリアにより幅がありました。
- ② 出沒 12月31日までに323件（山形県発表の市町村別目撃件数一覧より）。初夏の市街地周辺への出沒や目撃情報は多くなりましたが、秋の出沒件数は抑えられました。

- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 1件

7. 福島県

- ① 豊凶 情報なし
- ② 出沒 福島市を含む県北での出沒数が多いです。
- ③ 捕獲 図2の通り
- ④ 人身事故 1件





後藤優介（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）

概況 2018年は特に群馬県と栃木県で偶数年に大量出沒となり、捕獲頭数が増加する傾向がありましたが、過去の大量出沒年と比較すると捕獲頭数が少ない年となりました（図4）。また、環境省により集計されたデータから、関東各県における月ごとの出沒件数の推移をみると（図5）、春から夏にかけての出沒は例年と同様もしくはそれ以上であったものの、秋には出沒が減少した傾向がありました。人身事故は後述の通り、群馬で2件、埼玉で1件発生しています。

なお、各県の情報は丸山哲也さん（栃木県）、石田健さん（埼玉県）、羽太博樹さん（神奈川県）、山崎晃司さん（東京都）に補足いただきました。



図4 関東地区における過去10年間の捕獲数の推移 環境省HP・クマ類の許可捕獲数から一部修正して作成（2018年のみ12月までの速報値を用い、他は年度ごとに集計、非捕殺個体を含む）

1. 群馬県

① **豊凶** ミズナラ、コナラが不作であるものブナは並作であり、大量出沒年よりも堅果類の実は良い。

② **出沒** 出沒情報が2018年4～8月の累計で484件と過去2番目に多かったものの、9月以降の秋の出沒は収束しました。春から夏の過去の出沒件数をみると6月もしくは7月に出沒のピークがありますが、2018年は5～8月に継続して100件を超える多さで出沒したことが

特徴的でした（図5）。

③ **捕獲** 2018年は207件の捕獲がありました。偶数年に多い過去の捕獲数の水準と比較すると少ない件数となりました。

④ **人身事故** 7月29日に沼田市戸神町で、戸神山登山道でクマと遭遇し男性1名が負傷（70代男性）、9月25日にはみなかみ町東峰で、犬の散歩中クマと遭遇し負傷（60代女性）の2件が発生しています。後者は、リンゴ園のそばの町道を犬の散歩をしていたところ襲われており、周辺には観光施設や住宅が点在している地域での発生でした。過去10年間では毎年2～9件の人身事故が発生しており、2018年は少ない件数でしたが、山間部が多い群馬県では登山道での不意の遭遇を避ける注意が常に必要であるとともに、分布拡大地域での事故防止にも同時に努める必要があります。

2. 栃木県

① **豊凶** ブナは並作でミズナラ、コナラは不作～並作。

② **出沒** コナラ、ミズナラの結実が良くなかったことから、栃木県ではクマの出沒が晩秋まで続くことと、通常はクマがいない里地での出沒があることを懸念していましたが、年間を通した出沒数は59件と過去5年間でもっとも少なくなりました（図5）。

③ **捕獲** 近年は隔年で捕獲頭数の増加と減少が繰り返されており、2018年は増加の年にあたりましたが、実際は37件と過去の捕獲が多い偶数年の水準と比較すると少ない件数でした（図4）。これは群馬県と同様の傾向が見られました。

④ **人身事故** 過去10年間では2014年を除き毎年1～4件の人身事故が発生していましたが、2018年は発生がありませんでした。

3. 埼玉県

① **豊凶** ミズナラは並作のやや良い方（場所によって濃淡あり）、ブナは凶作です。

② **出沒** 2018年は合計で33件の出沒が公表されており、過去6年間の中では最も少ない件数でした。出沒の多かった2014年、2016年と比較すると2018年は秋の出沒件数が少なく春に多かったことが分かります（図5）。

- ③ **捕獲** 7件の捕獲があり過去10年間の中では少ない水準でした。
- ④ **人身事故** 71歳の男性が、10月13日の朝に秩父市の霧藻ヶ峰登山道お経平付近でクマの親子と遭遇し軽傷を負う事故が発生しています。被害にあわれた方は山小屋従業員で、木の上に子グマがいるのを目撃したのち、母親と思われるクマに襲われたと報じられています。

4. 神奈川県

- ① **豊凶** ブナが凶作~並作、ミズナラ、コナラが並作と比較的よい結実状況でした。
- ② **出沒** 2018年の目撃・痕跡件数の合計は12月24日現在で72件であり、2014年度の112件ほどではありませんが、やや多い年となりました。春から夏にかけて目撃や痕跡の件数が多かったのですが、秋以降は落ち着き、群馬、栃木、埼玉と同様の傾向がありました。また2018年度は、人里より山中での目撃が多かったです。
- ③ **捕獲** 昨年（2017年度）は錯誤捕獲された1頭が放獣された事例のみでしたが、2018年は2件の捕殺事例がありました。5月に秦野市名古木でくくり罠に錯誤捕獲された個体が人身被害を未然に防止するためやむを得ず殺処分となり、また6月には伊勢原市大山で追い払いを行ったものの繰り返しの出沒が続いたため箱罠による捕獲を実施し、やむを得ず殺処分されています。
- ④ **人身事故** 2016年に1件発生した以降、事故は発生していません。

5. 東京都

- ① **豊凶** ブナは凶作~並作であるが、ミズナラ、コナラは並作~豊作と比較的良い結実状況でした。
- ② **出沒** 2018年の出沒件数は59件と過去6年間で2番目に少なく、秋の出沒も少なく推移しています。
- ③ **捕獲** 昨年（2017年7月）は有害捕獲が1件ありましたが、2018年も8月に1件の有害捕獲がありました。奥多摩町日原地区において民家の倉庫を荒らすなどの被害が発生したことから箱罠によって捕獲された個体が殺処分となっています。

- ④ **人身事故** 2014年の1件の発生以来、今年も事故の発生はありませんでした。

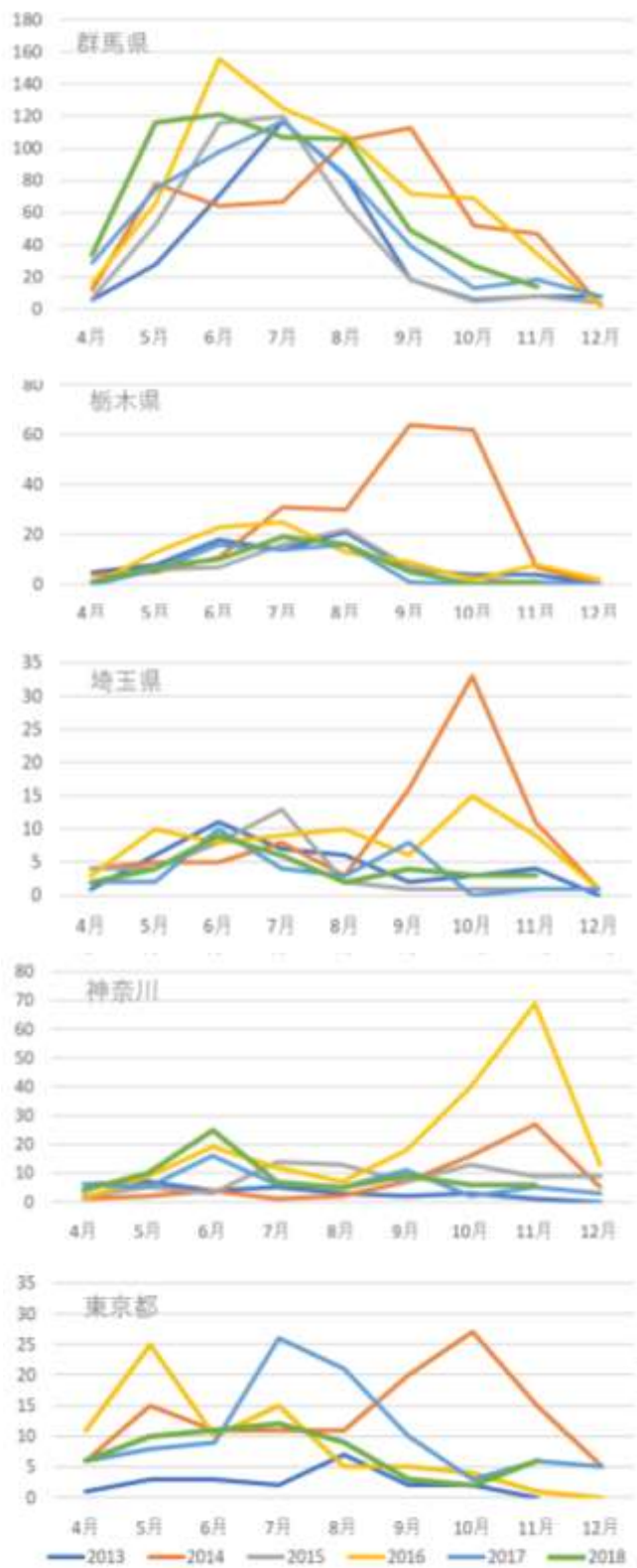


図5 関東各県における2018年の月別出沒件数
環境省HP・クマ類の出沒件数・12月更新速報値を利用、
神奈川県の出沒件数は2017年以前は自動撮影カメラでの
撮影件数を含み、2018年は含まない



玉谷宏夫（NPO法人ピッキオ）
竹内 翔（静岡県経済産業部管理局）
加藤春喜（NPO法人白川郷自然共生フ
ォーラム）
早川美波（信州ツキノワグマ研究会）

1. 愛知県

① 豊凶 情報なし

② 出沒 県が提供している情報によると、2018年は県内で5件の目撃がありました。このうち、瀬戸市ではセンサーカメラによって撮影され、確実にクマであったことが分かりました。目撃があったのは5月、6月のみで、もともと目撃情報が少ない愛知県でも、落ち着いた1年でした。

③ 捕獲 情報なし

④ 人身事故 報告なし

⑤ その他 奥三河地域の新城市からは、クマが木に登った際にできた爪痕の情報をいただいています。愛知県内で生息していることは確実なようです。

2. 静岡県

① 豊凶 ブナ、ミズナラ等の結実状況は並作でした。

② 出沒 静岡県のツキノワグマは、富士山周辺地域を中心とする「富士地域個体群」と南アルプス地域を中心とする「南アルプス地域個体群」に二分されます。2018年度に県が集計している目撃情報は、4月4件、5月9件、6月5件、7月7件、8月5件、9月3件、10月3件、11月5件となっています。地域個体群別に見ると富士地域で27件、南アルプス地域で14件でした。4月から5月にかけては、親子グマの目撃情報が多く見られました。

③ 捕獲 情報なし

④ 人身事故 人身被害は発生しませんでした。

⑤ その他 今後も引き続き県内全域においてクマ剥ぎ被害の実態と推定生息数の把握を進め、効果的な対策を講じる必要性を感じています。



3. 岐阜県

① 豊凶 岐阜県は10月、飛騨地方のブナやミズナラが凶作、コナラが凶作と予測し、クマ出沒の注意喚起を促しましたが、白川村ではミズナラ、コナラ、クリ、オニグルミ、トチノキ、ツノハシバミといった堅果は概ね結実していたようで、人家近くのクリやカキ、オニグルミをクマが食べた痕跡も見当たりませんでした。

なお、白川郷自然学校の初雪は10月31日に観測。根雪になったのは12月18日からでした。

② 出沒 県が公開している県域統合型GISぎふ「岐阜県クママップ」によれば、2018年は県内で269件のツキノワグマの目撃情報がありました。2017年に比べ、190件の減少です。

月別では、3月2件（いずれも誤認の可能性あり）、4月12件、5月42件、6月111件、7月52件、8月27件、9月12件、10月4件、11月5件、12月2件と、例年通り6月をピークに目撃例が減少する傾向でした。地域別では、飛騨地方197件、美濃地方72件と山間部の飛騨地方が73%を占め、こちらも例年通りの傾向です。

③ 捕獲 情報なし

④ 人身事故 人身傷害があったとの情報なし

4. 長野県

※各種統計値は、11月末日時点の数字を長野県林務部よりご提供いただきました。

① 豊凶 県林務部によると、ブナは凶作～並作、ミズナラとコナラは凶作から大豊作まで、地域によってまた単木ごとのばらつきが大きかった。クリ・クルミは、全県的に一定程度の結実がみられた、とのこと。

② 出沒 全県的にみると2006年、2010年、2014年と4年おきに「大量出沒」が続いており、今年も出沒が多くなるのではないかと心配されていました。実際に6月までは過去最多ペースで目撃が相次ぎ、その理由として、春の気温が高くクマの活動が早まったり、住民の関心が高く目撃情報が多く寄せられたりした可能性が指摘されました。

一方で、7月以降の目撃件数は平年並みとなり、その後、ブナ科堅果類が一定程度結実したことを受けて、県林務部は里地への大量出沒の可能性は低いとの見解を発表しました。

③ **捕獲** のべ捕殺頭数は164頭であり、保護管理計画に定めた平常年の上限頭数以下となりました。このほか、シカやイノシシ用のわなに錯誤捕獲されたクマがのべ316頭に達しました。一昨年、昨年も322頭、249頭のクマが錯誤捕獲されており、県や現場サイドでは錯誤捕獲の件数を減らすことを目的として、わなの改良や捕獲時期・場所の工夫を行っています。また発生してしまった錯誤捕獲へ対応するため、県内各地に配置したクマ対策員がすぐに駆け付けられる体制をとっています。

④ **人身事故** 5件（5名）発生しました。死亡事故はありません。すべて山中での事故であり、3件はくくりわなで錯誤捕獲されたクマに近づいた際にワイヤーが切れて交錯したというものでした。捕獲にあたる作業員や一般通行者への、より一層の注意喚起が求められます。



白石俊明（立山カルデラ砂防博物館）
箕口秀夫（新潟大）
有本勲（山立会）
松村俊幸（福井県自然保護センター）

概況 4県（新潟県、富山県、石川県、福井県）とも2018年の堅果結実はおおむね良好で（表1）、秋の出沒件数は年間の1～2割程と少なく、大量出沒のない平穏な年となりました（大量出沒年は秋の出沒件数が全体の6～9割を占める）。出沒件数のピークは各県とも6月で、ここ数年5～7月あたりの出沒件数が増加傾向にあるようです（図6）。人身被害は福井県を除く3県の山中や山麓で延べ10件発生

し、山菜・キノコ採り5件、釣り2件、写真撮影帰路1件、伐採作業中1件、鶏舎作業中1件でした。また、事故にはなりませんでした。各県とも山塊から数キロ離れた市街地や集落での出沒事例が、春や夏にありました。

1. 新潟県

① **豊凶** 過去2年、ブナは全県で不作でしたが、2018年の堅果結実はおおむね良好でした。

② **出沒** 出沒件数は600件で、2016年の816件、2017年の940件に比べて減少しました。これは9～11月の秋季の件数が少なかった事によるものです。4～6月の春季の件数は過去2年同様に多く、2014年以降から、痕跡・目撃情報において春季が秋季を上回る状況が続いています。6月には胎内川河口近くの焼却処分場で体長1mのクマが目撃されるなど、海岸近くや平地での出沒も数件ありました。

③ **捕獲** 有害捕獲頭数は平年並みの121頭（11月暫定）で、多かった過去2年の約半数でした。

④ **人身事故** 6件・6名で命に別状なし。高齢男性がクマ本来の生息域で遭遇する事例が多かったです。

▶4月18日9時30分、80代女性、山菜採り、斜面を登る際に正面から襲われ足首負傷、体長0.8～1m、十日町市 ▶5月23日13時、70代男性、山菜採り、頭から頸部を引掻かれる、軽傷、阿賀町 ▶6月8日8時40分、70代男性、伐採作業中、体長1m、背後から背中を引掻かれる、長岡市 ▶7月31日15時、50～60代男性、溪流釣り、顔や腕から出血、軽傷、湯沢町 ▶9月23日13時30分、60代男性、溪流釣り、顔や頭を引掻かれる、妙高市 ▶9月26日11時15分、40代男性、キノコ採り、親子グマ2頭、左手を引掻かれる、軽傷、新発田市

表1 2018年の北陸4県 of 堅果結実・出沒・人身事故の概況

		新潟	富山	石川 ※2	福井
	ブナ (前年2017年)	○～◎ (×～△)	○ (△)	◎ (○)	△ (△)
堅果結実 ※1	ミズナラ (前年2017年)	△～○ (△～○)	○ (△)	◎ (◎)	○ (△)
	コナラ (前年2017年)	△～○ (△～○)	△ (○)	○ (○)	○ (○)
出沒	1～12月の件数 (過去10年平均)	600件 (581件)	149件 (349件)	178件 (177件)	337件 (310件)
	9～11月の件数・％ (過去10年平均 ％)	72件・12％ (277件・38％)	28件・19％ (204件・41％)	30件・17％ (66件・32％)	66件・20％ (154件・35％)
事故	件数・人数 (過去10年平均)	6件・6名 (4.2件・4.5名)	2件・2名 (2.6件・2.9名)	2件・2名 (2.2件・2.2名)	0件・0名 (2.2件・2.3名)

※1 堅果結実 凡例：◎豊作、○並作、△不作、×凶作 ※2 石川県は目撃のみで痕跡等を含まない
各県及び環境省HP掲載情報より作成

2. 富山県

- ① **豊凶** 並作傾向で、過去数年に比べて良好でした。
- ② **出沒** 出沒件数149件で、2004年（大量出沒年）の統計開始以来、最も少ない年になりました。しかし、出沒のピークとなった6月には山岳観光地での事故と平野での出沒がありました。平野の出沒は、山塊から約5km離れた扇状地の水田地帯をクマが日中徘徊し民家敷地内で駆除されるという事案でした。
- ③ **捕獲** 有害捕獲頭数は31頭（11月暫定）で非大量出沒年の平均よりも少ない数でした。
- ④ **人身事故** 2件・2名で命に別状なし。山中と山林に囲まれた養鶏場で発生しました。山中の事故は年間100万人（うち30万人が外国人）の旅行者が利用する国立公園内のケーブルカー駅付近で、山岳カメラマンが林内で出会い頭に襲われ重傷を負うというものでした。5秒程と短時間の出来事だったそうです。周辺はスギやブナの巨木が生育する天然林で、ネマガリタケなどクマの採食物が豊富な時季でもあり、筍のシーズンが終わるまでの間は遊歩道を閉鎖し、道脇の藪を刈払い見通しを確保する取組み、外国人向けの掲示を行う等の対策がとられました。
 - ▶ 6月5日13時10分、60代男性、山歩き中、小ぶりのクマ、あおむけに倒れた時に顔を噛まれ胸を引掻かれる、重傷、立山町
 - ▶ 9月17日18時5分、40代男性、養鶏場の扉を修理中、鶏舎内から現れた親仔2頭、頭や腕を引掻かれる、軽傷、小矢部市
- ⑤ **その他** 6月の山岳観光地での事故及び平野での出沒共に、パトロールに同行する関係者やマスコミ取材班がヘルメットやクマ撃退スプレーを着用しておらず、危機意識が低い事が危惧されました。

3. 石川県

- ① **豊凶** 堅果結実はブナ・ミズナラが豊作でした。
- ② **出沒** 目撃件数は178件と平年並み、秋の目撃は平年以下でした。しかし、ピークとなった6月の目撃件数は68件で年間の約4割を占めました。春～夏に目撃情報が多い傾向は2013年頃から顕著で、里山の個体数増加や白山山麓から離れた能登半島での分布拡大など、

生息状況の変化が背景にあると考えられます。能登半島のかほく市では5月に、加賀地域の小松市では6月に海岸近くの平野部で複数の目撃や痕跡情報がありました。この他にも、白山市の扇状地で起きた集落内の車庫侵入、金沢市や能美市での市街化された丘陵地における目撃など、春～夏に人の生活圏での出沒が多数報告されています。

- ③ **捕獲** 有害捕獲数は32頭（11月時点の暫定値）で非大量出沒年の平均と同程度でした。
- ④ **人身事故** 2件・2名。いずれも山中で発生しました。
 - ▶ 4月28日8時45分、70代男性、山菜採り、成獣1頭、顔や腕を引掻かれ脇腹も噛まれる、重傷、金沢市
 - ▶ 5月19日9時20分、60代男性、山菜採り、巣穴（原文ママ）から現れた成獣1頭、腕や足を噛まれ腰を骨折、重傷、金沢市

4. 福井県

- ① **豊凶** 堅果結実は過去と比べて良好でした。
- ② **出沒** 出沒件数は平年並みの337件、秋は非大量出沒年と同程度の件数でした。しかし昨年から6～7月に出沒が多い傾向があり、里山での生息数増加が背景にあると推察され、奥越地方で起きた市街地での出沒1件もこれが必要だと考えられます。また、個体数が少なかった敦賀市以西の嶺南地方においても6～7月の出沒が増加傾向にあり、個体数が増えていると考えられます。ただし、特定のクマが里山内の道路を横断する事で目撃件数を増やしている傾向も見受けられました。

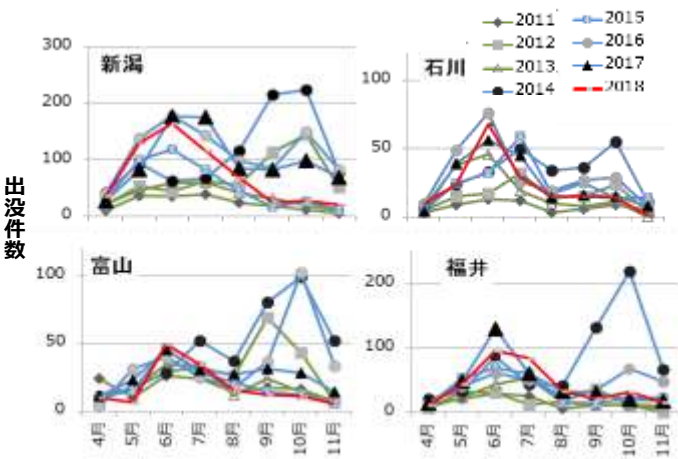


図6 北陸4県の出沒件数 石川県は目撃の情報のみ

③ **捕獲** 有害捕獲数は昨年から急増し、2018年は143頭（うち非捕殺7頭）と大量出沒年に近い数に達しており、これは個体数の増加と分布拡大が要因と考えられます。里山を中心に生息状況の変化が見られる事から、適正な生息数や管理方法を検討する為、出沒位置・件数・時期、捕獲数の変動を今後もモニタリングする必要があります。

④ **人身事故** ありません。一人一人が注意するようになってきた成果とも考えられます。



中川恒祐
(野生動物保護管理事務所)

1. 近畿北部地域（兵庫県・京都府・滋賀県・大阪府）

① **豊凶** 兵庫県、京都府、滋賀県では豊凶調査が実施されています。今年度の結果は、兵庫県ではブナが凶、コナラが並下、ミズナラが並上で3種全体では並下で、昨年度より凶作です。京都府ではコナラ、ミズナラが並、ブナ、イヌブナが凶で、ブナ科全体としては凶作に近い並作で、昨年度より凶作です。兵庫県、京都府共に昨年度より堅果類の実りは悪く、今年度の秋の出沒が多少増加した要因だと推察されます。滋賀県ではブナ、コナラ、ミズナラ共に不作でした。

② **出沒** 兵庫県・京都府・滋賀県・大阪府は最新の出沒・目撃情報をweb上で公開しています。兵庫県、京都府、滋賀県については、現在把握できている情報を以下の通りグラフにまとめました（図7、各府県とも12月まで）。グラフでは今年と過去3年間（2015~2017）の各月の出沒数を示しています。

滋賀県では例年と同様に、春に出沒が多く、秋に出沒が減少しました。兵庫県と京都府は年間を通して、大きな増減は見られませんでした。両府県とも一昨年度は大量出沒年となりましたが、今年の秋期の出沒数は昨年度より高いものの極端な増加はありませんでした。とはいえ、年間の出沒数は10年ほど前と比べると大きく増加していることから、今年度も通年で出沒が高止まりしたといえます。

大阪府では今年度5件の出沒がありました。大阪府は分布の最前線ということもあり、例

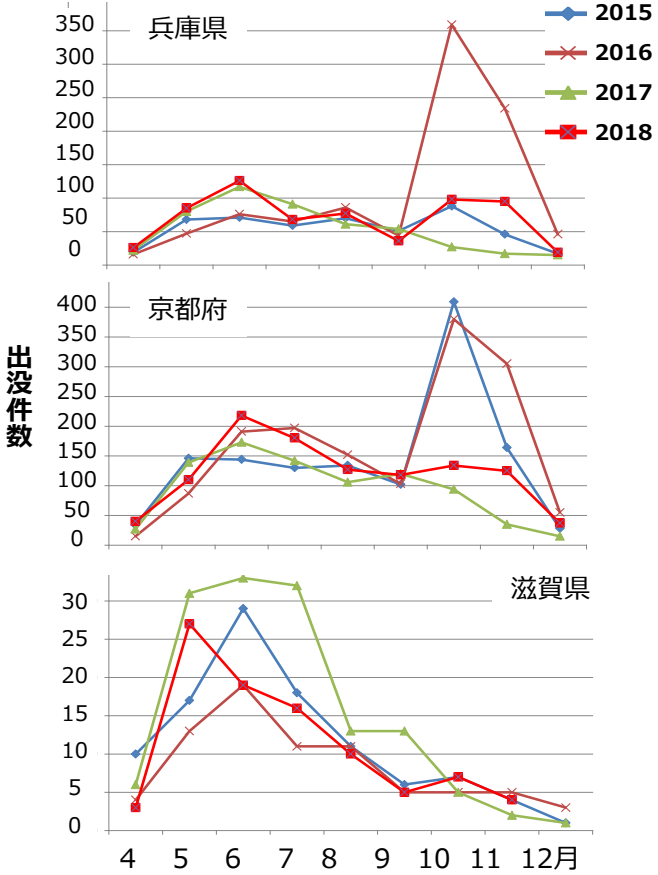


図7 兵庫県・京都府・滋賀県における2015～2017年の各月出沒数

年と変わらず出沒は多くありませんでした。とはいえ、数年前までは出沒すらほとんどなかったことに比べ、ここ数年は毎年一定の目撃情報があることから、確実に分布が広がっていると考えた方がよさそうです。

③ **捕獲** 情報なし

④ **人身事故** 情報なし



2. 近畿南部地域（奈良県・和歌山県・三重県）

① **豊凶** 情報なし

② **出沒** 紀伊半島での季節ごとの詳細な出沒情報は把握できていません。和歌山県は市町村別に出沒情報をweb上で公開していますが、今年の出沒件数は35件で（1月8日時点）、平年並みの数値となっています。奈良県、三重県も特筆すべき出沒数の増加は発生していません。近畿南部のクマ（紀伊半島地域個体群）は環境省の定める「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されていることから、全体としては多くの出沒はありません。

③ **捕獲** と ④ **人身事故** 情報なし



澤田誠吾
(島根県中山間地研究センター)

1. 西中国地域 (山口、広島、島根県)

① 豊凶 西中国地域の3県合同で実施している目視による豊凶調査では、クマノミズキ、シバグリ、コナラおよびミズナラは並作、ブナ、アラカシは凶作でした。実際に奥山を踏査してみるとシバグリやミズナラの樹上にはクマ棚が形成されていました。

② 出沒 2018年のクマの目撃件数(被害、痕跡、捕獲件数を含む)は5~7月には多い状況でしたが、8月以降は減少して11月にはやや増加しました。①のように、9~10月は多くの餌資源があったことから目撃と捕獲が減少したと考えられます。

③ 捕獲 広島県は38頭、山口県は23頭でしたが、島根県では145頭の捕獲がありました。島根県では、5~8月には多かったものの、9~10月には減少しましたが、11月には再び増加しました(図8)。

3県での捕獲合計206頭のうち、錯誤捕獲が79%を占めました。捕獲が多かった島根県では、捕獲個体の年齢査定を2月に実施予定のため、体重と全長の関係から年齢構成を推定してみました。2018年に捕獲された個体の体重と全長を2003~2017年度に捕獲された1~3歳の個体のものと比較するとほぼ同様の傾向を示しました(図9)。なお、2018年と2003~2017年のオスの捕獲割合はいずれも73%でした。このことから、2018年春~夏季には警戒心の少ない若いオスが出生地から分散する過程で、人里付近へ出沒して捕獲された個体が多かったと推測されます。島根県西部地域では、6~8月に集落内に出沒した個体が目立ちました。6月はモモ、クワ、7月はモモ、8月は

養蜂蜜朧、ナシ、モモ、濃厚飼料への被害がありました。大量出沒年にみられるようなクマが農作物等に執着して、被害が継続する状況は認められませんでした。しかし、11月に入るとカキへの被害が増加しました。捕獲個体の中には皮下脂肪が5cmを超える個体もあって、十分な脂肪をつけた個体が多く捕獲されました。まるで、越冬前にデザートを食べに集落へ来ているように感じられました。

④ 人身事故 5月には山口県山口市で、また12月には島根県浜田市で人身事故が発生しました。被害者の方へはお見舞い申し上げます。山口県での事故は、16時55分頃に男性(60代)がニホンザルの有害捕獲(銃器)で民家の裏山に入ったところ、斜面上部からクマが向かってきて襲われました。この男性は、右大腿部に咬傷を負ったものの軽傷でした。島根県での事故は、くくりわなに錯誤捕獲された個体が出たため、ハンター1人、県職員2人および市職員1人が現場へ向かい殺処分と決まりました。ハンターが発砲したところ、くくりわなのワイヤーが切れてクマがハンターを襲いました。市職員と県職員1人が助けに向かったところ、クマは2人の職員にも襲ってきました。他の県職員1人が助けに向かったところ、クマは山林奥へ逃げて行きました。ハンターは、両腕の骨折、顔面への咬傷で重症、

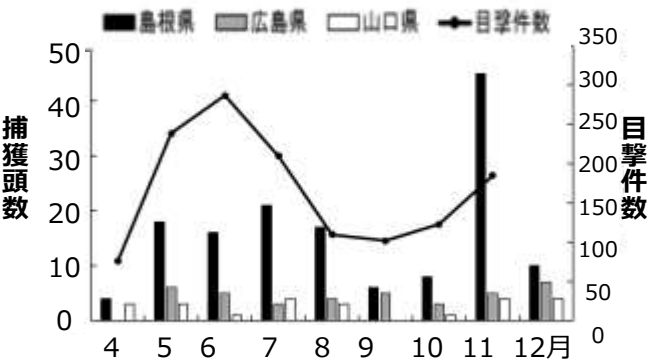


図8 2018年の西中国地域の捕獲頭数と目撃件数

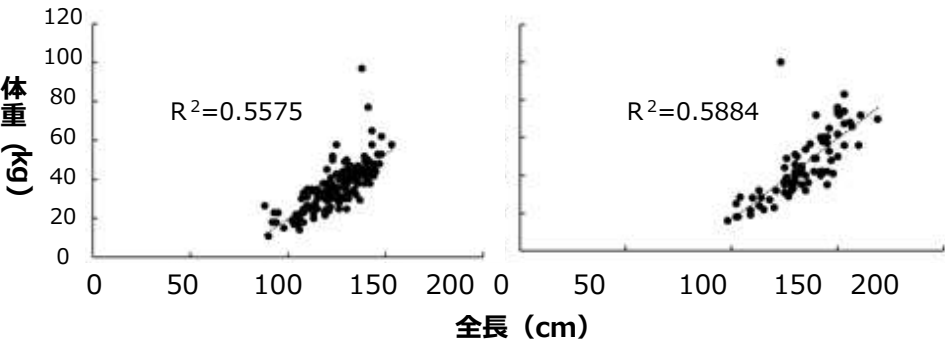


図9 4~9月の捕獲個体における体重と全長の相関関係
左：2013~2017年の1~3歳
右：2018年4~9月の個体(年齢不明)

職員は左頬から顎への咬傷で重症、県職員は左目上への咬傷で軽症でした。今回の事故は、現場へのアプローチ等のシミュレーションが不十分であったことが原因と考えられましたが、詳細な聞き取り調査は今後を実施予定です。

2. 東中国地域

① 豊凶 情報なし

② 出沒 情報なし

③ 捕獲 東中国地域の捕獲数（4～11月）は、鳥取県では6月と11月に捕獲が多く58頭、岡山県では6月に多く16頭の合計74頭でした。鳥取県では9～10月は減少したものの、11月に再度増加した西中国地域と同様の傾向でした。中国5県では捕獲数や市町単位での捕獲場所を情報共有しており、西中国地域個体群との連続性について引き続き注視していく必要があります。

④ 人身事故 情報なし



山田孝樹
(四国自然史科学研究センター)

① 豊凶 堅果類の結実状況は、目視による調査を実施しました。ブナは並作～豊作、ミズナラは豊作でした。

② 出沒 徳島県で1件の情報があり、養蜂箱（自家消費用）が被害にあったという情報でした。昨年度も3件の養蜂被害関連の情報が寄せられており、今後、養蜂に関連した人との軋轢の増加が懸念されます。そこで、四国自然史科学研究センターでは今年度からJBNのギブワン助成を受け、地域の養蜂家の方と連携して養蜂被害防除のため電気柵設置の取り組みを実施しています。四国ではクマの生息数が少ないためクマ用に被害防除を行うという意識が希薄であり、今後、被害防除の方法や必要性の普及を図る必要があると考えられます。

③ 捕獲 と ④ 人身事故 情報なし

★四国プロジェクト及び関連情報★

昨年2017年度から地球環境基金の助成を受け、四国自然史科学研究センター、日本自然保護協会と連携して四国のクマの保全プロ

ジェクトを開始しています。

四国のツキノワグマの生態調査は、高知県と徳島県にまたがる剣山地及びその周辺を中心に、環境省中国四国地方環境事務所、林野庁四国森林管理局及び地元NPOにより継続して実施されてきました。ヘアトラップ、カメラトラップ、GPSテレメトリーによる追跡調査や堅果類の豊凶調査などが行われています。

昨年度からはJBNによるカメラトラップ調査も始まりました。環境省などによりこれまで実施されてきた調査は、生息の中心地域が主な対象となっていたため、周辺地域での生息状況の把握が課題となっていました。JBNの調査ではより広域（中心地域の外側）を対象に生息状況の把握に努めています。今年度は62台の自動撮影カメラを設置し、4地域で複数のツキノワグマの生息が確認されました。

JBNではカメラトラップ調査の他にも、5月に東京農業大学でシンポジウム「四国のクマ・絶滅へのカウントダウンを止めるために」、1月には高知市内でシンポジウム「四国のツキノワグマが絶滅しそうー私たちにできることって何だろう？ー」

及び、様々な団体とのコラボプログラムとしてトランクキットを用いた普及啓発イベントをのいち



動物公園において実施しました。さらに、四国内の動物園4園と協力し、各園に普及啓発用の看板を設置しました。

四国のツキノワグマの個体数は、2013年からこれまでに最低15個体（幼獣を除く）が確認されています。捕獲個体の年齢や子連れ個体の撮影などから、1997年～2012年までは1～3年に1度の頻度で確認され、2013年以降は毎年繁殖が確認されています（今年度の調査でも子連れの個体が確認されました）。しかし、既知個体の再確認も多く、識別個体数はあまり増加していません。JBNが実施している広域の調査においても、新たな生息地や個体を多く確認できている状況ではありません。現在も個体数は非常に低い水準にあると考えられ、今後も個体群の状態を注視していく必要があります。

九州地区は、特に報告なしとのことでした